

●（公開講演2）

# 南の島の中世集落

総研大・国立歴史民俗博物館 准教授

村木 二郎

**松田** 続いては、今、講演を終えられた永越信吾さんの主任指導教員を務めました日本歴史研究専攻、村木二郎准教授による講演となります。場所はぐっと南のほうにいきまして、「南の島の中世集落」というタイトルで報告をお願いしたいと思います。それではお願いします。

**村木** 皆さん、こんにちは。総合研究大学院大学日本歴史研究専攻と歴博で考古学をやっています村木と申します。よろしく願いいたします。今の永越さんのお話が関東周辺の集落であったことに対して、時期はだいたい同じぐらいになる、13世紀後半、14世紀、15世紀がメインになるのですが。ただ、場所は全然違う南の島です。

沖縄島を中心とした琉球弧。南九州の島々から、奄美、沖縄、それから宮古、八重山、それがさらに台湾へとつながっていく東シナ海世界（図1）。那覇を中心に非常に活発な交易が行われ

て、琉球王国が華やかな一時代を築いたと教科書にも書かれるようになっていきます。琉球王国の中心である沖縄島を中心に、現在は与那国島までの間が沖縄県となっているわけです。ですので、何となく宮古島を中心とした宮古も、石垣島や西表島などからなる八重山も、最初から沖縄という感覚で思ってしまうがちです。しかしこの地域が琉球王国の中に入ってくるまでには長い歴史があります。

琉球王国は、北のほうは与論島、徳之島、奄美大島、喜界島、さらにかなり北のほうまで頑張って進出しようとしています。最終的に薩摩の島津にやっつけられてしまうので、あまり北のほうに積極的に行ったイメージ

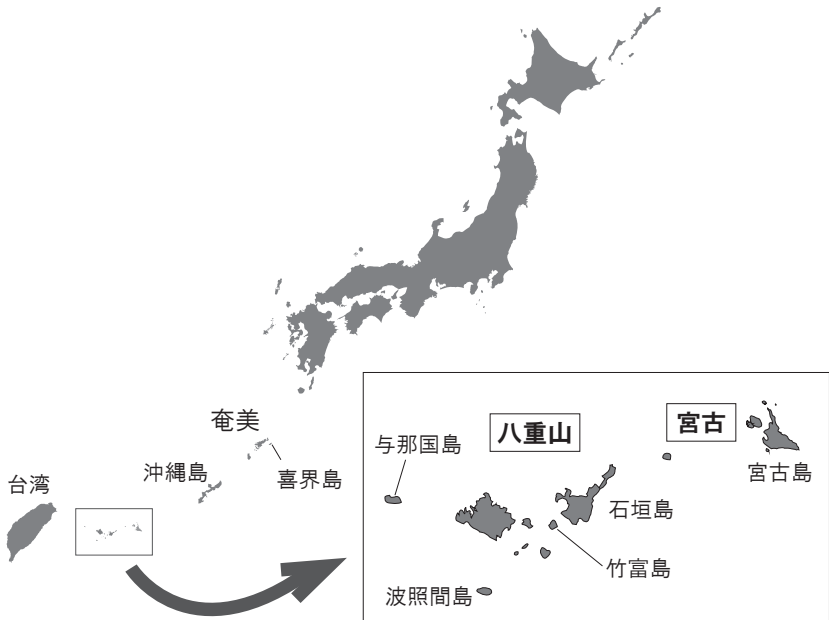


図1 宮古・八重山の位置

ジはないかもしれません。しかし薩摩は戦国時代の最後の段階で急に強くなりますが、それ以前はむしろ琉球王国のほうが薩摩にちよつかいを出していたくらい。種子島にも琉球のほうが、「那覇まで船を出してもいいぞ」と言っただけ、それぐらい北のほうまで手を出していた時代もありました。

この琉球王国は、統一されるまでは沖縄島の中もバラバラで、このバラバラの時代を三山時代と言います。島の北側が山北、中ほどは中山、南側が山南と呼ばれています。13、14世紀のころが三山時代で、各地に按司（アジ）という大名のような有力者が割拠していました。

それが15世紀の初めに、佐敷グスクにいた尚思紹、尚巴志、とくに息子の尚巴志が頑張るので。もともとは山南にいた尚巴志が、中山の中心である浦添を攻略して、中山王になります。さらには山北の巨大な城である今帰仁グスクを陥落させ、ついに最後に残っていた山南もやっつけ、本拠地を浦添から首里へ移して、沖縄島を統一する。これが15世紀の前半の話になります。

尚巴志は事実上初代の王になり、尚巴志の系統が尚氏という王統を作ります。しかし尚巴志が亡くなって以降は混乱の時代が続いたと言われています。一族による王位継承争いの志魯・布里の乱、内乱です。それから有力按司による抗争とされる護佐丸・阿麻和利の乱。そういうかなり不安定な時期を経ます。その間には、勝連グスクのような巨大なグスクが存在し盛んに力を持っているのですが、結果的に首里王府によって滅ばされましたので、見方によっては王府の力が強まったという解釈もあります。

ただ、この第一尚氏は残念ながら早いうちに、家臣のクーデターによって滅んでしまい、金丸

という家臣が王位につきます。金丸は尚氏とは関係ない出自なのですが、中国に対する建前上、自分も尚氏だと名乗って、第二尚氏という王統が出来上がります。この第二尚氏が明治時代の頭まで続く王統です。

この第二尚氏の中で、第3代の王である尚真王が50年間ぐらい琉球を治めて、この人のときに全盛期を迎えます。いろいろなことをやっているのですが、大きな菩提寺を造ったり、今日の話の中で一番重要な太平山征服などをおこないます。太平山とは宮古や八重山のことです。八重山の酋長のオヤケアカハチというのが言うことを聞かない、年貢を納めるのを2〜3年間もサボっているので、征伐してやった。そういう上から目線の記録が残っています。これは同時代の史料である「百浦添之欄干之銘」にも一五〇九年に刻まりました。

17世紀、日本で言うところの江戸時代の初めに、首里王府が自分たちの歴史書を編纂していきます。その中で第一尚氏の時代や、さらにはその前の三山時代の歴史なども書かれるのですが、後から作られた歴史がほとんどで、琉球の中世、三山時代や第一尚氏の時代のことは案外分かっていません。

さらに分らないのが八重山や宮古の歴史です。この地域に関しては、同時代の史料は中国や朝鮮の史料にごくわずかに出てくるぐらい。それ以外は考古学の資料しか残されていないです。ですから、時期的には中世に当たりますが、はっきり言って弥生時代のようなものです。外国の文献にちらっと出てくるだけで、あとは考古学の資料しか残っていない。そういうところです。しかし、ここにはたくさんの中世の集落遺跡があります。この中世集落がどういうものかを今

からご紹介します。

たとえば八重山のなかの観光地・竹富島の現在の集落は、日本の原風景、日本のかつての集落はこんなものと言われる。しかしそれは18世紀以降の集落の姿であり、中世の片鱗も残していません。整然と碁盤の目状と言ってもいいくらいの真つすぐな道が続いて、そこに石垣がめぐっていて、一軒一軒の家が区画されていて、隣の家とは外の通路を通って行き来する。こういう景観は非常に新しい姿です。

もともとはどうだったのか。たとえば石垣島のフルスト原遺跡は国の史跡になっていて、整備されています。現在は石垣がぐるりと巡り非常にきれいに残っているように見えるのですが、これは整備をして積み上げたものです（写真1）。



写真1 石垣島のフルスト原遺跡

発掘調査時はかなり崩れてはいましたが、それでも琉球石灰岩というサング礁の石垣を積み上げて、屋敷囲いを造っている様子はよく残っていました。

全体の図（図2）を見ますと、隣の家とは壁でつながっています。真ん中の部分は第二次世界大戦のときに崩れてしまったようで、本来なら台地の全面に、不定形の石垣が細胞状につながっていたと思われます。この集落の中には道路がありません。隣の家とくっついていて、石垣の切れ目でおそらく行き来していたのだろうと考えられています。北東側の台地の縁は、15mほどの崖が落ち込んでいます。この崖の下には井戸があります。八重山、宮古は水を得る

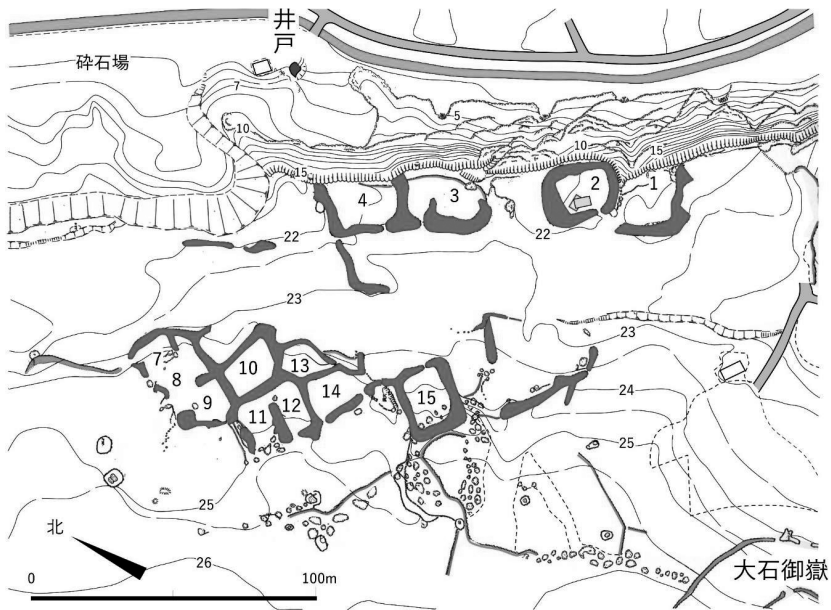


図2 フルスト原遺跡模式図（小野正敏氏作成）

のが大変なところですので、井戸を設けることができることが集落が立地するにあたって非常に重要なポイントになってきます。

フルスト原遺跡は発掘調査が一部されているのですが、たとえば重要なのは2番目の屋敷囲い（図3）です。本来なら発掘調査をすれば、何層にも分かれて土が堆積していますので、何時期かに分けた建物跡を発見することができますのですが、琉球はサンゴ礁の石のガラガラが入ってしまって、分層するのが非常に難しいようです。ですので、おそらく何時期かの堆積があるのでしようが、一時期のものとして発掘されています。たくさん柱穴が見つかっていますが、

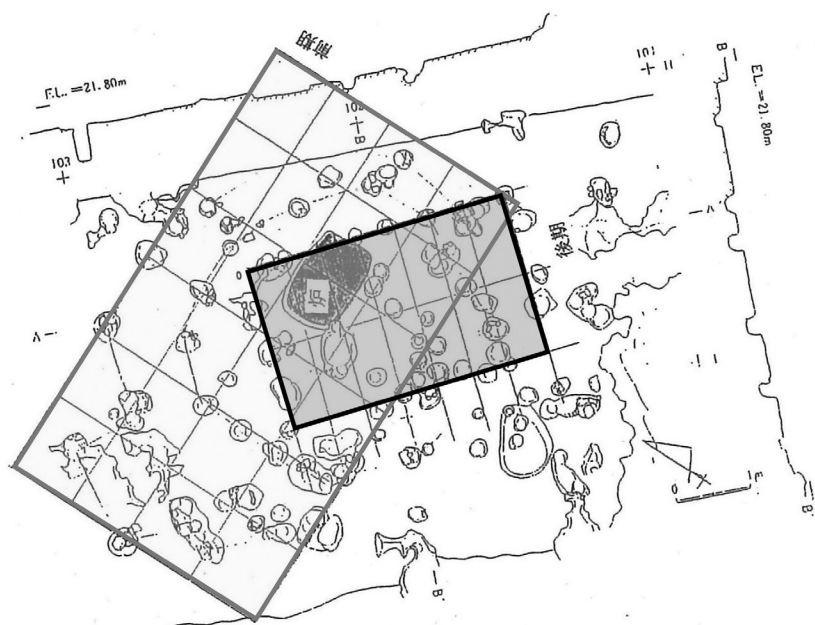


図3 フルスト原遺跡第2号石塁の柱列（小野正敏氏作成）



その真ん中に焼けた部分があつて、これは炉だと考えられます。この炉を囲んで八角形ぐらいの建物があつたと理解されていたのですが、歴博の名誉教授の小野正敏さんがこれを見直したところ、2時期に分かれると言われました。炉の上にも柱の穴がかかっているのです、この柱については炉よりも新しい。また別に、この炉と同時の建物も見えるので、これが最初の時期の建物である。それと重なるところに炉を使わなくなったあとの建物があつて、2時期の建物が追えるというわけです。

最初の建物は、東西南北の方位に合わせて建物の方向が決まっています。ですので崖の向きは全く関係ありません。それが次の建物になりますと、崖に沿った石垣の方向に合わせて建物が建っています。これはどういうことかという、最初の時期には石垣の囲いはなかったのだろうということです。ある段階から石囲いを作るようになったのだろう。この石囲いの集落が八重山、宮古でたくさん見つかったのですが、最初からこの石垣があつたわけではないのだろうということが、この事例から分かるわけです。

それがいつからかというのはまだ突きとめられていないのですが、こういう遺跡から出てくる資料には大量の白磁や青磁があります。この中でも、われわれが注目するのがビロースクタイプⅡ類とか浦口窯系と言われる白磁です。これはどちらも福建省で焼いているもので、日本列島の中ではほとんど見つかることはありません。沖縄島よりも、宮古、八重山のほうがたくさん出くらいです。さらには15世紀代までの青磁が大量に見つかります。これが八重山、宮古の集落の特徴です。



●（公開講演 2）

次に竹富島の花城村跡遺跡を見てみます（写真2）。崖の部分に注目してください。自然の崖の下に井戸があり、崖の上には石垣が積みれています。こういう石垣が発掘せずとも地上に残っているのです。これが集落を取り囲んでいます。この内側には細胞状にめぐった屋敷囲いが無数にあるわけです。

遺跡の平面図を詳しく見てみましょう（図4）。10番と30番は少し大きな区画です。10番の横の6番と5番、7番のあたりを発掘しているのですが、6番の石垣をまず積んで、6番の石垣の壁を利用する形で次に5番の石垣が組まれていることが分かりました。ということは、こういう石囲いは最初から全部造るのでは



写真2 竹富島の花城村跡遺跡を囲う石垣

なくて、少しずつ増殖するような形で集落が広がっていったことになります。おそらく最初に一番大きな区画が造られて、この周りに取り付くようにして細胞状に集落が広がっていったのだらうということです。

ある時点でこの集落は滅亡するわけですが、現在、御嶽（ウタキ）というお社のようなものが2カ所に祀られています。沖縄に行くと、御嶽という聖なる場所が各地にあります。この御嶽はもともと宮古や八重山にはなかったのです。沖縄島から入ってきた信仰です。先に結論を言いますと、首里王府が侵略して入ってきたあとに、こういう御嶽が作られるようになります。かつて自分たちの祖先たちがいた集落はもう滅んでいるのですが、そこに御嶽を構えてここから真つすぐ見た場所を遥拝するような形で、地元の人たちは今も村の祖先を祀っているのです。御嶽から見た先が、自分たちの村を作った先祖の最初の屋敷だろうと考え

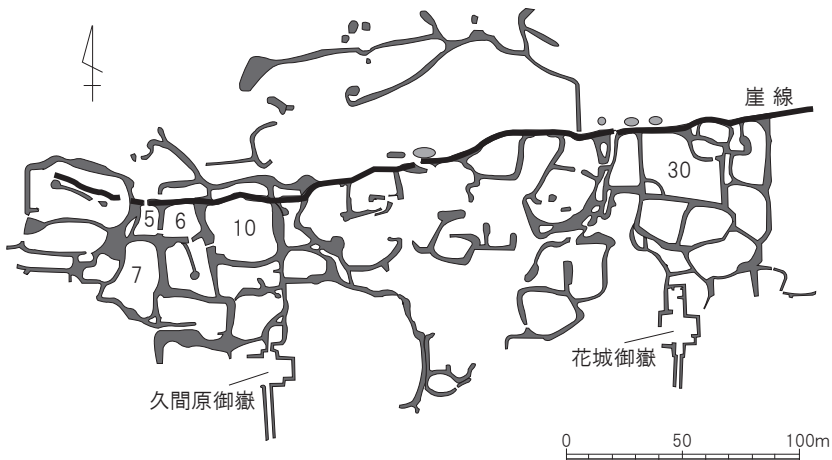


図4 花城村跡遺跡模式図

られるのです。こうして、現在も地元の人たちの生活に溶け込んだ形で信仰があり、その信仰の対象となっているのが、おそらくその村を開いた中世の人たち、自分たちの先祖だったのだろうと考えられます。

こういう細胞状の集落は、竹富島ではほかに新里村遺跡でも見つかっています。それから、波照間島のマシユク村跡遺跡（図5）やミシユク村跡遺跡。八重山に特徴的です。

こういう集落遺跡を考えるにあたっては、大量に出土している陶磁器を分析する必要があります。陶磁器は年代を示す遺跡の時計ですので、陶磁器を分類し、その点数を数えることで、集落の消長が分かるわけです。沖縄の集落遺跡からは中国産陶磁器が大量に見つかりますので、報告書ではすべてを取り上げずに特徴的なものを掲載する

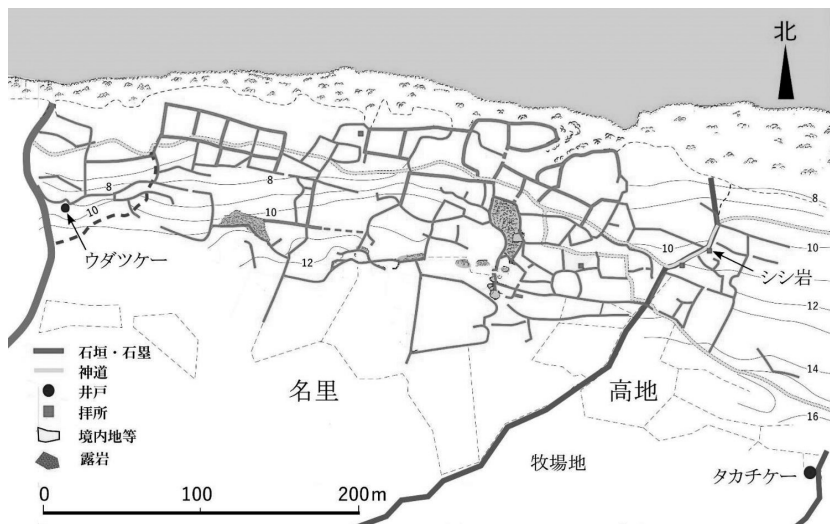


図5 波照間島のマシユク村跡遺跡模式図（小野正敏氏作成）

ことが多いです。しかし同じものがどれくらいたくさん含まれているか、その分量を示すことで遺跡の盛衰が分かりますので、時間がかかってでも全点確認することが望まれます。われわれ歴博のチームでは、その作業にこだわりました。文献史料には一切出てこない集落から、何千、何万という大量の青磁や白磁が見つかったのです。これらを使って、文献史料のほとんどない八重山・宮古の中世の歴史を、考古学の手法で解明することができるのです。

分析対象としては、発掘調査によって大量の遺物が見つかった遺跡を取り上げました。さらに八重山・宮古を相対化するための比較対象として、沖縄島より北方の奄美地方の集落遺跡も扱いました(表)。

宮古島では住屋遺跡とミヌズマ遺跡の陶磁器調査をやりました。住屋遺跡は現在も宮古

表 集落遺跡出土陶磁器の時期変遷

|     | 時期    | I              | II             | III            | IVa            | IVb            | V              | VI             | 不明   | 計     |
|-----|-------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|------|-------|
|     |       | 11 後 -<br>12 中 | 12 後 -<br>13 前 | 13 後 -<br>14 前 | 14 後 -<br>15 初 | 15 前 -<br>15 中 | 15 後 -<br>16 前 | 16 中 -<br>16 末 |      |       |
| 宮古島 | 住屋    | 2              | 17             | 422            | 500            | 1994           | 2741           | 187            | 4681 | 10544 |
|     | %     | 0.0            | 0.3            | 7.2            | 8.5            | 34.0           | 46.8           | 3.2            |      |       |
|     | ミヌズマ  | 29             | 12             | 428.5          | 633.5          | 65             | 2              | 0              | 147  | 1317  |
|     | %     | 2.5            | 1.0            | 36.6           | 54.1           | 5.6            | 0.2            | 0.0            |      |       |
| 竹富島 | 新里村   | 12             | 1              | 198            | 557.5          | 209            | 4.5            | 0              | 42   | 1024  |
|     | %     | 1.2            | 0.1            | 20.2           | 56.8           | 21.3           | 0.5            | 0.0            |      |       |
| 石垣島 | フルスト原 | 0              | 9.5            | 771.5          | 2021.5         | 1674.5         | 2011.5         | 3.5            | 2404 | 8896  |
|     | %     | 0.0            | 0.1            | 11.9           | 31.1           | 25.8           | 31.0           | 0.1            |      |       |
| 喜界島 | 大ウフ   | 88             | 47.5           | 88             | 144            | 30             | 22.5           | 0              | 363  | 783   |
|     | %     | 21.0           | 11.3           | 21.0           | 34.3           | 7.1            | 5.4            | 0.0            |      |       |
|     | 中増    | 0              | 4.5            | 12             | 44.5           | 58             | 7              | 0              | 59   | 185   |
|     | %     | 0.0            | 3.6            | 9.5            | 35.3           | 46.0           | 5.6            | 0.0            |      |       |

島の中心で、宮古島市役所が置かれていますので、ずっと中心だったところです。ここは16世紀に入っても、数は減りますがずっと、近世になっても、17、18世紀の遺物も出てくる場所です。これはなぜかという点、どうもこの住居遺跡に拠点を持っていた豪族が、琉球が入ってきたあとは琉球王国に従い、琉球が八重山に軍隊を送るときには協力した。琉球側についた人物が拠点にしていたところなので、滅ぼされなかった集落というわけです。

これに対してミヌズマ遺跡は、13世紀、14世紀、15世紀の前半ぐらいまではモノがたくさん出たのですが、その後、急に途切れるように遺物が出なくなります。これだけ極端にモノが出なくなるというのは、考古学の判断としては、この時点で集落が消滅したと考えます。

竹富島の新里村遺跡も14世紀の後半から15世紀の初頭に、ここから出ている遺物の半分以上あるぐらい、たくさんさんの陶磁器が出たのですが、その後、16世紀にかかる前に、がくつとモノがなくなります。

石垣島のフルスト原遺跡は、新里村より少しは長続きしますが、二千点以上の破片数が見つかったという時期の次にいきなり3.5点に落ち込んでいます。（この0.5というのは、二時期のどちらか判断がつかないような場合に、それぞれの時期に0.5ポイントずつカウントするために生じた数値です。）おそらくこの間で集落が断絶する。

喜界島、奄美のほうは、もう少し先に集落が断絶する傾向が見られます。喜界島の大ウフ遺跡は15世紀の初頭ぐらいがピークですが、がくつとモノが減る。中増遺跡はそのあと若干ありますが、やはりがくつと遺物がなくなる。

ということ、15世紀のある段階、あるいは15世紀の末から16世紀の初めぐらいに、奄美であったり宮古であったり八重山であったりの集落が消滅していくことが分かるわけです。

さらにはこういった遺跡で見つかる陶磁器を単なる時計として使うだけでなく、どういうタイプのものが出ているかも分析していきます。細かいところは放っておきまして、最初に陶磁器が増えてくる13世紀の後半から14世紀の前半を見ておきますと、宮古や八重山ではここでききなりぐっと遺物が出てきます。出てくるのは浦口窯系の白磁、あるいはビロースクⅡ類といわれている白磁。こういうものがどっと出てきます。

それに対して沖縄島よりも北側の奄美地方。喜界島では、浦口窯やビロースクⅡ類はまったくなくて、白磁皿Ⅲ類と呼んでいるタイプ。それから蓮弁文が入っていてきれいな青磁碗BⅠ類。奄美のほうではこういうのが出てくる。そういうものは八重山、宮古ではほとんど出てこない。実はこういうのは、鎌倉などでもたくさん出るタイプです。基本的に日本列島どこでも出るようなタイプが奄美で見つかっている白磁や青磁です。沖縄島でもわんさか出ます。

こうしたことから何が分かるかというと、一番古い段階、まだ11世紀の後半か12世紀の前半は、基本的には八重山・宮古の地域には中国産陶磁器はほとんど入ってきていません。沖縄島で陶磁器が出るようになってくるのがこの時期です。

博多では11世紀の後半から急に陶磁器が出るようになって、「白磁の洪水」といわれています。日宋貿易ですね、寧波から大量の白磁が運ばれてくるわけです。これが日本全国に広まって、奄美のあたりでもたくさん出ますし、那覇でもたくさん出る。しかし八重山・宮古あたりでは、ま



●（公開講演 2）

れにはありますがほとんど出ない。それが13世紀後半から14世紀の前半になると、浦口窯系やビロースクタイプⅡ類の白磁がこのあたりで急に見られるようになる。

沖縄島の北側は皿のⅨ類、それから青磁の蓮弁文、日本列島全体どこでも見られるタイプで、博多経由のルートでおそらく入ってきた。しかし八重山・宮古にはほとんどこないの、沖縄島以北と八重山・宮古の間には活発な交流はなかった。だから八重山・宮古には、中国から直接モノが入ってきていたんです。ここがポイントです。沖縄島のほうから入ってきたのではなくて、このあたりは直接、福建とモノのやりとりがあったわけです（図6）。

沖縄島ではまったく見られない細胞状の集落形態。そして、貿易陶磁器のタイプも八重山・宮古に独自の傾向があった。こう



図6 東シナ海の交易ルート



した事実から、13世紀の後半から14世紀の前半は、八重山・宮古は独自の文化圏であったことが分かるのです。

これが14世紀の後半さらには15世紀の初頭となってきましたと、これはもう琉球が三山時代を克服して琉球王国が沖縄島を統一していく時期ですが、このころになると沖縄島で出ているモノと八重山・宮古で出るモノとが、同じ傾向になってきます。八重山・宮古には、福建方面から直接入ってくるモノもあったでしょうが、沖縄島を経由して運ばれてくるモノが主流となった。これが集落遺跡から出てくる陶磁器から見た印象です。

文献史料がほとんどない世界ですが、集落の形態、それからその集落から出てくる陶磁器を分析していくことによって、こうした現象を押さえることができます。

沖縄島の琉球王国の力が強くなってきた、宮古・八重山に圧力をかけるようになってきた中で、これらの地域の集落が消えていった。現在、われわれが知っているような新しい集落は、それより前にあった中世の集落が消滅したあとに形成された、まったく新しい集落ということになるわけです。

『中山世鑑』や『中山世譜』という、近世に編纂された沖縄の歴史書にはいろいろと詳しいことが書かれています。しかしそういう後世に編纂された史料は、まず疑ってかからないといけません。勝者によって書かれた歴史ですので、自分たちの都合のいいように書いている可能性があります。ですから、たとえば一三九〇年に宮古島から沖縄に使いを送ってきて朝貢したといった類いの記事は、本当かなと疑わないといけないわけです。

しかしただ単に疑っているだけでは駄目です。違うのではないかと言うために、先ほどの陶磁器の分析結果を見ていくわけです。宮古島ではミスズマ遺跡が15世紀前半までで突然消滅してしまったことが分かっています。そうするとその時期、15世紀のどこかの段階で集落が急になくなったということは何かあったのだろう。一三九〇年、ここには画期は見られないけれども、一四〇〇年代の前半から中ごろのどこかで、どうも何かがあったらしい。それがまさに琉球王国の支配下に入るようになったことではないかと思われます。

石垣島など八重山では、少し遅れて集落が消滅していくわけですが、この次の段階、おそらくこれは一五〇九年の銘文にあったように、言うことを聞かない太平山の連中を尚真王がやつけたという上から目線の記録が思い当たります。尚真王の立場からは、あいつは言うことを聞かないからやつつけてやった、となるかもしれません。しかしそうではなくて、八重山には独自の文化圏があったわけですから、それが琉球による軍事侵攻を受けて支配下に置かれた、と解釈した方が客観的ではないでしょうか。

与那国島にも豪傑がいましたが、そこを一五二二年に征伐したと近世に琉球王国の立場から書かれた文献史料にはあります。集落遺跡から見つかる陶磁器を見ていくと、今回は詳しく取り上げなかったために表には入れていませんが、15世紀の終わりから16世紀の初めごろに与那国の中世集落も消滅していったことが分かります。

さらにもう一つ興味があるのは、沖縄島からは宮古や八重山は全然見えませんが、与那国島からは台湾が見えます。それだけ近いのですが、与那国まで支配下に置いた琉球王国も、ここから

もう一步先へというのはなかったことです。だから今ここに国境線が引かれているわけです。台湾の14世紀、15世紀の集落がどういうものであったのかは非常に興味がありますが、まだそうした研究は進展しておらず、台湾の研究者もよく分からないと仰っています。これは今後の研究課題です。

今日の話を整理します。13世紀の後半から14世紀、沖縄島がまだ三山に分裂していて、琉球王国が統一していなかったころ。八重山と宮古は、沖縄島とはまったくかけ離れたところで独自の集落を営んでいて、中国の福建地方と交易を直接おこなっていた。こういう時代があったのです。それが、沖縄島が統一されると第一尚氏の段階で奄美や宮古の中世の集落が断絶しますのうと思われます。琉球はこの時期、島内の敵対勢力を排除し、一族の争いを収め、有力按司を肅清して中央集権化を進めていったとも考えられ、内外に対する権力が膨張していった時期にあたります。

第一尚氏はクーデターによって倒されましたが、新たにできた第二尚氏、とくに尚真王の時期に太平山へ侵攻した記述があるように、実際に八重山あるいは与那国の集落が消滅していきました。これらの地域はおそらくそのころに琉球の支配下に入ったのでしょう。そういうことが考古学の資料からある程度裏付けられるのではないかと思うわけです。尚真王は、自分が作らせた梵鐘に「尚真帝王」という銘文を書かせるぐらいの気概のあった人物です。こうした琉球の動向に關して、われわれの研究チームでは「琉球帝国」などと表現することもあります。

関東の集落とは全然違うものであったかもしれませんが、南の島の集落を先ほどの永越さんの話に引きつけるとすれば、あまり分散せずに集住していたということになるでしょうか。関東の考古学ではなかなか集落遺構のまとまりを見つけるのが難しいのですが、南の島はありがたいことに、屋敷の石囲いが現在でも分かるくらいに残っていますので、いろいろなものを考えるにあたってのヒントになると思われます。

私の話はここまでにいたします。どうもありがとうございました。

**松田** ありがとうございます。講演に続きまして、永越さん、村木さん、そして私、松田の3名による鼎談を行います。舞台の準備をしますので、少々お待ちください。